

昭和二十三年十月一日発行
平版十号
通巻九七号

京鹿子



10月号

—近詠—

山開き 丸山佳子

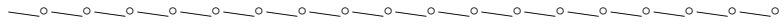
六根清浄ま夜の枕に河鹿の音

考へを変へねば今日も黄砂濃き

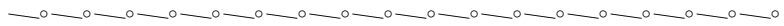
十薬のにほひも神のおぼしめし

人の前よぎる健康さうな蝶





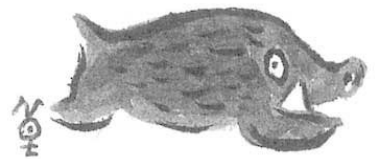
石に石木に木を積んで祭用意
ほととぎす松の切株三百とは
杉落葉ふむこめかみに力入る
山開きニユースで今日は老いわする
走り梅雨人の心も十人十色
小鳥引く急ぐな山は動かない



豊田都峰

清響集 その七十八

川すぢにまた出て風になる涼しさ
堰たぎるつばめは反りてまたいちど
山の端の日へ手をあげてゐる案山子
夕風や足跡つづくばかりなる
夕風にたひらなかけをのこしゆく
船虫の一目散の艦あたり



盆客としての明かりの二夜なる
蝸を終章として灯をともし
風汲めば嵯峨野は新涼なる香り
露草にまた月草に愛宕みち
端像の襞ひとすぢづつの新涼
ひぐらしのとぎれしよりのひとりなる
とろろ汁のどもとにある故山の風
とろろ汁家郷の味の濃かりける

秀華採集

青葉風捕へてみれば鮑屑

伊藤 希眸

まさしく俳諧。具体的に扱えたものが楽しい。しかし考えてみると鮑屑もなかなか風流である。そして作者もしばし風狂のほおえむのである。

鮎ひかり川せばまれば郷近き

西村 摩耶子

牡丹散る武家の絵巻は終章に

新井 哲石

前句、せばまるといふ地形は生活に大いに係わる。「みなと・せと・と」などみなその狭さを利用した形。そんな原点の立場で鮎を迎えている。後句は「牡丹散る」がたいへん象徴的である。

鈴鹿 仁

禅問答

初あきつ嵯峨野の風の乗り具合
蝉の穴どこまでつづく禅問答
句碑に触れ一つの道へ秋の声
秋兆すまほらの里へ峠越す
とろろ飯火灯し頃のゆるびかな
たまきはる長寿の里のとろろ汁
麦とろや山から河から母の声

近 詠

宇都宮滴水

ふろしき

みの虫の重さに負ける風力計
雲去りて今おだやかな夏ひばり
をとり鮎使ひ切れなき嘘の数
植田風送電塔の遠見癖
ふろしきに包みて余す夕焼雲
青蚊帳や残り灯だけを恃みとす
老鶯やいま風鐸のおよび音

神麓集



新関 一杜

啄木鳥や駆逐する記憶の塔
曼珠沙華いきなり燃えて仏去る
おのが記憶深土に疼く穴まどひ
掌に未来が廻る木の実独楽
眞赤かな石榴ころげて廻るパンテノン

林 日 圓

天平の雲海わたる倍臚かな
勇壯に倍臚を舞へり青嵐
楯鉦を両手にしかと青葉風
老鶯の啼き声まねて鳥の舞
管弦の双調ねとり山滴る

北村 香朗

三男が社長の椅子に六月盡
冷蔵庫に徹の嘲る芋羊羹
亡き妻に叱られてをり厨徽
払つても叱言の妻や夏椿
神宿る築波は二峰青田波

父の日 丸山 冬鳳

雷突然夜のカーテン耳塞ぐ
雷神の山の落雷木霊音
雷火立つ杉山巒をたくるかに
男梅雨その凝り肩へ塗擦薬
父の日の筆の穂先を整えり

藤岡 紫水

広重の夕立浮世絵はみ出せり
照り戻りして花合歓に昼の雨
手に掬めばきらめく眞砂泉殿
身のほどを知るは幸せ水中花
結び目も蝶よ花よ亀よと鉦を組む

牛 窓 和田 照海

夢二絵の貌のひとりや白日傘
夢二絵の女になるまで緑蔭に
子燕の白いホテルのまぶしさに
オリブの花曇りなる空と海
白南風や彫深くして海難碑

神麓集



梅雨入りはやや内股でやつてくる
六月の音 錆つきて妻が留守
あまたある心の傷に水を打つ
わが余生 団扇の作る風でよし
ちちははを宿に忘れて夏岬

松田 都青

道をしへ道忘る時 空へとび
すんなりと通らぬまこと 蟻の道
青梅雨に髪 膚染まりて庭掃除
銚町に住みし日 憶ひ 囃子 聞く
常ながら雨もよひなり 桜桃忌

船越 美喜

奇跡とは人身 龍変ほととぎす
涼しさや飛龍の鐘と名づけられ
炎天下六打の鐘にこころ足る
炎天の極楽橋を渡りきる
皇内に始まる院のほととぎす

角 直指

河馬の目の見送つてゐる 渡り鳥
朝の虫いつか一人になる 豫感
パリ錦秋ハミング少女パン抱いて
秋の夜の話をせば 長き戦後かな
もういいかい 秋の彼岸の日が沈む

渡り鳥 竹貫 示虹

風炉手前茶染めの帛紗ま新し
若竹の箸添へられし茶懐石
登山バスの紆余曲折を興じけり
天帝に研がれし利鎌月涼し
怪談の季節 闇濃き秋成忌

丹生をだまき

遠花火 老の標的 外れ易し
手花火や美しき嘘もてあそぶ
暗闇が貼りついてゐる 遠花火
手花火のゆらぎに 妬心ちらちらす
異次元に たましひ遊ぶ 遠花火

花 火 柴田 朱美

神麓集



大夕焼 森 津三郎

臘梅の実となる過去の色忘れ
音たてて田水流れる暗渠かな
アスファルトに釘打つ男日に灼ける
コスモスの苗床並ぶ猪名河原
片仮名の看板殖える大夕焼

奥村 鷹尾

夕立雲出づると見るや降り猛り
入梅の序の口乍ら荒れ模様
「ささやきの道」仔鹿牝鹿の胸に寝る
米寿 吾庭の老梅共に老ゆ
ざり蟹の鬪志にお手上げ型しさる

参勤の文字 伊藤 希眸

富士・浅間夏霧に透き峠の天
梅雨峠乗り合ふ肘の打つことも
参勤の二文字梅雨の峠茶屋
きつつきの雛の声降る峠越え
時鳥碓水峠を斜すに飛び

高木 智

蜘蛛の囀をグリーンベルトの上に張り
夏草の一本づつの細さかな
大空へ向け渾身のキリギリス
キリギリス大起重機は停止中
かなかなやつると過ぎし黙示録

愚痴 丸井 巴水

鳳梨の芯抜き地獄覗き込む
夏そこに太子二歳のふくよかさ
愚痴のないをみなは怖しえごの花
二分動ける午後の梅雨の晴れ
ひとの死を黒が囀ひて花うつぎ

梅雨に入る 松本 鷹根

梅雨に入る湖灯台の黒木組み
紫陽花の紺は濡れ色早起きす
泥色に寄り添ひ梅雨の鯉でゐる
若竹の彩眺望を解きほぐす
泣きさうな日に梶子は香を強ひる



京鹿子集

豊田都峰選

青葉風捕へてみれば飽屑

螢火のいま現し世の天上華

千仞の谷を遊び場鳶の夏

木瘤あまた神千年を容れて夏

天地無用軽鳴の子凝つて深睡り

鮎ひかり川せばまれば郷近き

更衣かくて古りゆく月日かな

ふかぶかたと夕べを沈め濃あぢさぬ

悲しみは人ごとならず夏の萩

万緑の襷あざやかに刷きおろす

千葉 伊藤 希眸

亀岡 西村摩耶子

牡丹散る武家の絵巻は終章に

喜寿と古稀八十八夜の灯を惜しむ

鯉のぼり煽て上手な風の神

丸の内ビルはノツポに薄暑かな

母の日の。メールに妻の長電話

炎天下背筋の伸びた老紳士

絵日傘や病棟回る女医ひとり

パーティーの氷菓づくりは夫の役

イラン人と悩み分け合ふ遠花火

四十度夾竹桃は今日も咲く

茅ヶ崎 新井 哲石

五ノ子 伊吹 之博